学校における児童・生徒の精神衛生に対するコミュニティ・アプローチ
—調査と実践—

無藤　隆・青木　紀久代・北村　琴美（お茶の水女子大学）　櫻井　聖子（東京農業大学第一高等学校）

＜要　旨＞

国立大学付属校(幼・小・中・高)と共同して継続的に取り組んでいる実践的研究の中から、本報告では、２つの調査結果を報告する。調査１では、附属小学校４年生から高校生までの1056名を対象として、児童・生徒の全般的なメンタルヘルスを把握するためのメンタルヘルス尺度の検討を試みた。その結果、「抑うつ傾向」「対人不安」「攻撃性・衝動性」「非効力感」「身体症状」の５つの下位尺度が得られ、それらの下位尺度と現実生活の適応(友人関係・親子関係および学校場面での適応)とが予測される方向で有意に関連していることが示された。調査２では、調査１に回答した中学２年生４クラスの各学級担任に、メンタルヘルスが低かった生徒の結果に対する意外さの程度とそれらの生徒の印象についてインタビューを試みた。メンタルヘルス調査の結果を学級担任が意外だと評価した生徒は一クラス平均約１名存在し、教師から概ねポジティブな印象で捉えられているため援助の必要性を感じさせにくい生徒だと推測された。

＜キーワード＞

学校臨床、実践研究、メンタルヘルス、児童・生徒、インタビュー調査

【問題】

我が国において学校臨床心理士が多くの学校に配置され、教育場面における心理的問題への対処の水準は格段に向上したと思われるが、従来の諸機関との連携、教師との役割分担のし方など、実践的な研究はまだまだ少ない。学校臨床心理士の効果に加え、学校臨床そのものの役割についても、もっと明確で深い理解が早急に求められている。さらに教育現場のニーズとしては、個々の児童・生徒の不適応問題が生じてからの対処もさることながら、心の問題に対して予防的で、また発達促進的な援助体制づくりが強くある。

【目的】

このような社会的背景を受け、我々は附属校（幼・小・中・高）と協同し、次の４つを主要課題とした実践的研究を試みてきた。

（1）幼稚園・小学校・中学校・高等学校における幼児・児童・生徒の心理的健康の実態を縦断的に把握し、教育場面における心理的不適応が生じる因子を、発達的な視点でとらえ直すこと。

（2）養護教諭との協同によってより予防的見地から、幼児・児童・生徒への有効なメンタルヘルスに役立つ授業カリキュラムを開発へと展開させること。

(3)個別援助が必要な児童・生徒に対し、心理相談の専門家が教師と連携する。その効果を検討しつつ、学校臨床における有効な総合的援助システムのモデルを具体的に提示すること。

(4)(1)～(3)により、学校というコミュニティにおけるメンタルヘルスのあり方と有効な支援システムについての基礎的研究を附属校を対象に行った後に、公立校の調査を幅広く行い、特定の学校に限定されない、スタンダードなモデルへと推敲すること。

【研究の概要】

(1)期間：本研究は、平成 11 年度4月から、現在まで進行中である。

(2)構成：目的に照らして、本研究は、大きくは次の3つの側面を持つ。

①児童・生徒のメンタルヘルスの実態を知るために、アセスメントツールを整備する部分。

②それを用いてできるだけすみやかに、個々に応じた援助プログラムに移行するための援助システムを作りあげる部分。

③メンタルヘルスの予防的教育に還元していく部分。

図1に示すように、単年度ごとにメンタルヘルス調査を実施し、継続する。調査結果はただちに学校にフィードバックされ、担当生徒の援助・指導の参考資料とされる。つまり上記の①と②は、単年度の目標を積み上げていくことでより精緻化されていく。③は、ある程度臨床データが蓄積されたところで、カリキュラム作成に取り入れていくことになろう。

今回報告するのは、主に本研究助成期間における①と②の部分に関連するものである。まず、メンタルヘルス調査の結果と生徒の現実生活の適応(特に現実の友人関係や親子関係)がどのように関連しているかについて報告する。次に、調査から援助の必要可能性が示唆される児童・生徒としてリストアップされた個人毎の生徒像を担任のインタビューから拾い出し、検討を加えている。ここから、調査結果を担任の生徒の状況の把握に加えることの利点が見出せるであろう。

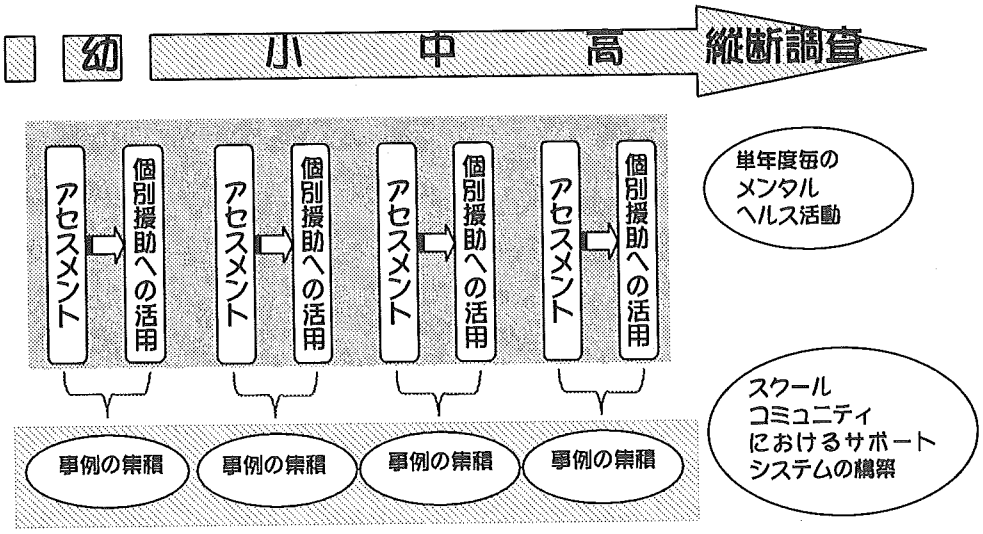

図1　本研究の構成

〈調査1:児童・生徒へのメンタルヘルス調査〉

【目的】

本調査は、【研究の概要】における①児童生徒のメンタルヘルスを把握するためのアセスメントツールの整備の部分に対応し、その目的は、①小学校高学年から高校生にわたって適用可能なメンタルヘルス尺度を作成すること、②作成したメンタルヘルス尺度と友人関係・親子関係に関する尺度および学校適応に関する尺度との関連を検討すること、の2点である。

【方法】

(1)調査対象　都内の小・中・高一貫教育の学校における小学校4～6年生391名(男子194、女子197)、中学校1～3年生420名(男子141、女子197)、高校1～2年生244名(女子のみ)の計1056名。欠席・回答拒否を除く1021名を分析対象とした。

(2)調査方法　各教室で質問紙調査を集団で実施した。児童・生徒への質問紙の配布、回収は教師によって行われた。

(3)調査項目　①メンタルヘルスに関する項目：園田ら(2000)の小・中学生のメンタルヘルスに関する尺度を一部修正して用いた。身体症状、抑うつ傾向、対人不安に関する各6項目、攻撃性・衝動性、非効力感に関する5項目、無気力、強迫性に関する各4項目、体重へのこだわりに関する2項目の計38項目で構成されている。②親子関係に関する項目：森下(1981)の子どもの親に対する親和性尺度を基に作成したものを使用した。③友人関係に関する項目友人関係の深さ(岡田,1991)や友人関係から生じるストレス(岡安・嶋田・坂野,1992)を測定する尺度を基に作成したもの使用した。④学校適応に関する項目　園田ら(2000)の作成した小・中学生の学校適応に関する尺度を一部修正して用いた。教師や規律への反発に関する9項目、学校生活場面での自信に関する6項目、学業重視傾向、授業や試験に対する不安、学校生活場面での引きこもりに関する各5項目の計30項目で構成されている。いずれの尺度においても、回答方法は「全く当てはまらない」から「とてもよく当てはまる」の5件法である。小学校から高校まで同一の質問項目を用いたが、メンタルヘルスに関する項目については、小学生には難しいと思われる表現に若干の修正を加え、小学生用の質問項目として用いた。

【結果】

1．各尺度の基礎的データ

(1)尺度構成および信頼性　①メンタルヘルスに関する項目：メンタルヘルスに関する38項目のうち、身体症状および体重へのこだわりに関する項目を除いた30項目について、中学校のデータを基に、主因子法による因子分析を行い、5因子を抽出した。プロマックス回転後の因子負荷量に基づき、第Ⅰ因子は「抑うつ傾向」、第Ⅱ因子は「対人不安」、第Ⅲ因子は「非効力感」、第Ⅳ因子は「攻撃性・衝動性」、第Ⅴ因子は「強迫傾向」と各因子を命名した。身体症状および体重へのこだわりに関する項目は、因子分析の結果、固有値の減衰状況（スクリープロット・テスト）から1因子構造をなしていると判断し、因子名を「身体症状」「体重へのこだわり」とした。②親子関係に関する項目：中学校のデータを基に、主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰状況（スクリープロット・テスト）から1因子構造をなしていると判断し、因子名を「両親との親和性」とした。③友人関係に関する項目：中学校のデータを基

に、主因子法による因子分析を行い、3因子を抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量に基づき、第Ⅰ因子は「友人に対する信頼感」、第Ⅱ因子は「友人との気兼ねした関わり」、第Ⅲ因子は「友人との不和」と各因子を命名した。

④学校適応に関する尺度：学校適応に関する項目について、中学校のデータを基に、主因子法による因子分析により、あらかじめ想定した5因子を抽出した。バリマックス回転後の因子負荷量に基づき、第Ⅰ因子は「反発」、第Ⅱ因子は「学業重視」、第Ⅲ因子は「引きこもり」、第Ⅳ因子は「授業・試験への不安」、第Ⅴ因子は「自信」と各因子を命名した。なお、小学校、高校については、中学校と同様の因子を想定し、主成分分析を行い、各因子の1因子性を確認した。各因子に負荷量の高い項目を選択し、それらの評定値を加算することによって、各因子の内容を反映する合成得点を作り上げた。各尺度の信頼性係数（standardized Cronbach's α）を算出し、十分な値が得られなかった、メンタルヘルス尺度のうちの「体重へのこだわり」と「強迫傾向」、友人関係に関する尺度のうちの「友人との不和」は、以下の分析から除いた。その他の尺度については、すべて、.60～.87の間の値をとり、ある程度の内的整合性が確認された(本分析に使用したメンタルヘルス下位尺度の項目例を表1に示す)。

表1. メンタルヘルス下位尺度の項目例(中・高生用)

抑うつ傾向
・過去の失敗をいつまでも引きずることが多い
・自分が悪かったと悩むことがある
対人不安
・たくさんの人がいるとどうふるまってよいか分からず、とまどうことがある
・人が大勢いるとうまく会話のなかに入っていけないことがある
攻撃性・衝動性
・気に入らないことがあると、あたり散らすようなことがある
・いやなことを頼まれたら、いいかげんなやり方をすることが多い
非効力感
・自分はたいした才能もないからえらくはなれないと思う
・自分は役立たない人間だと思う
身体症状
・いつも頭が重い
・いつも肩がこっている

注．小学生用は表現に若干の修正が加えてある

(2)メンタルヘルス尺度間の関連　全体的に弱～中程度の関連が見られ、相互に関連していると同時に、下位尺度の各々が独自の側面を持つことがうかがえた。小・中・高にわたって、「身体症状」と「抑うつ傾向」は、他の下位尺度ほぼすべてと正の有意な相関(r=.30～.56)を示したが、一方で「攻撃性・衝動性」は「対人不安」「非効力感」との間で、中・高においては有意な相関が見られなくなり、「攻撃性・衝動性」の持つ意味が、小学生と中・高生では異なる可能性が示唆された。

(3)学年、性別によるメンタルヘルス尺度得点の相違　学年、性別によって、メンタルヘルスに関する各下位尺度得点の平均値(表2)に違いが見られるかどうかを検討するために、学校段階別に学年×性の2要因の分散分析を行った。なお、高校は女子のみのため、学年による1要因の分散分析を行った。その結果、小学校では、「攻撃性・衝動性」において性の主効果が有意であり(F=6.43(1,370),p<.05)、男子の方が女子よりも得点が有意に高く、物にあたったり、人に対して攻撃的であったりすることが示された。中学校では、「抑うつ傾向」「対人不安」「非効力感」において性の主効果が有意であり(F=12.55(1,408),p<.01；F=3.94(1,407),p<.05；F=4.81(1,406),p<.05)、いずれにおいても女子の方が男子よりも得点が有意に高く、気分が落

ち込みがちで、対人関係に不安を感じ、自分の能力や将来を悲観的に捉える傾向が高いことが示された。小・中ともに学年の主効果および交互作用効果は見られなかった。高校においても、学年による有意な差は見出されなかった。

表2. メンタルヘルス下位尺度の平均値(標準偏差)

	抑うつ	対人不安	攻撃性衝動性	非効力感	身体症状
小4 男子	2.91	2.55	2.32	2.59	2.33
(n=60)	(1.04)	(0.91)	(0.85)	(0.99)	(0.82)
女子	3.02	2.73	2.38	2.50	2.33
(n=63)	(0.94)	(1.00)	(0.90)	(0.90)	(0.84)
小5 男子	2.86	2.42	2.64	2.24	2.22
(n=67)	(0.93)	(0.83)	(0.96)	(1.02)	(0.67)
女子	2.78	2.60	2.21	2.39	2.23
(n=67)	(0.99)	(1.03)	(0.82)	(0.85)	(0.85)
小6 男子	2.79	2.62	2.71	2.43	2.17
(n=63)	(0.99)	(0.90)	(0.97)	(0.90)	(0.75)
女子	3.10	2.58	2.40	2.34	2.21
(n=65)	(0.91)	(0.78)	(0.76)	(0.71)	(0.73)
中1 男子	2.53	2.26	2.70	2.44	2.13
(n=41)	(1.00)	(0.93)	(0.92)	(0.78)	(0.88)
女子	2.92	2.42	2.45	2.46	2.14
(n=86)	(0.95)	(0.86)	(0.76)	(0.84)	(0.68)
中2 男子	2.50	2.34	2.21	2.30	1.89
(n=47)	(1.00)	(0.86)	(0.65)	(0.77)	(0.71)
女子	2.90	2.60	2.43	2.56	2.20
(n=96)	(0.81)	(0.86)	(0.72)	(0.72)	(0.73)
中3 男子	2.72	2.46	2.87	2.87	2.29
(n=47)	(0.99)	(0.84)	(0.75)	(0.73)	(0.82)
女子	2.97	2.58	2.49	2.48	2.20
(n=93)	(0.93)	(0.86)	(0.71)	(0.82)	(0.73)
高1 女子	3.28	2.75	2.47	2.54	2.38
(n=115)	(0.87)	(0.84)	(0.64)	(0.82)	(0.75)
高2 女子	3.28	2.79	2.56	2.57	2.48
(n=110)	(0.93)	(0.90)	(0.69)	(0.85)	(0.79)

4．メンタルヘルスと親子関係、友人関係、学校適応との関連

（1）メンタルヘルス尺度と親子関係尺度との関連　メンタルヘルスと親子関係との関連を調べるために、メンタルヘルスの各下位尺度得点と親子関係尺度得点との相関係数を学校×学年×男女別に算出した。その結果、小学生では、「非効力感」および「攻撃性・衝動性」と「両親との親和性」との間の相関が、4年生女子の非効力感を除き、一貫して有意であり、両親との親和性を低く捉えている子どもほど、効力感が低く、攻撃性・衝動性が高いことが示された。また、5、6年生になると、「身体症状」との間にも有意な相関が見られ、両親との親和性の低さが、身体の具合の悪さと関連してくることが示された。一方、4、5年生で見られた「対人不安」と「両親との親和性」との間の有意な関連は、6年生になると見られなくなった。男女差については目立ったものはなかった。中学生では、男女による違いがやや見られ、男子は、全体的に女子に比べ、「両親との親和性」と有意に関連するメンタルヘルス変数が少なく、1年生では「非効力感」との間に比較的強い相関が示されたが、2年生では有意に関連する変数は1つもなく、3年生では「攻撃性・衝動性」との間に有意な相関が見られるにとどまった。一方、女子では、1年生では、「両親との親和性」は、「非効力感」および「身体症状」との間に、2年生では「非効力感」および「抑うつ傾向」との間に比較的強い有意な相関が見られ、両親との親和性の低さが、効力感の低さおよび身体の不調、抑うつ傾向の高さと関連することが示された。3年生になると、女子でも男子同様、有意な関連を示す変数が少なくなり、「非効力感」との間に弱い相関が見られるのみになった。高校生(女子のみ)では、「両親との親和性」との間に有意な相関が示されたメンタルヘルス変数は「身体症状」「非効力感」「攻撃性・衝動性」「抑うつ傾向」という小・中の女子と類似した結果が得られたが、いずれもその関連の程度は弱かった。

表3. メンタルヘルス下位尺度と両親との親和性尺度との相関係数

	両親との親和性													
	小4		小5		小6		中1		中2		中3		高1	高2
	男子 (n=60)	女子 (n=63)	男子 (n=67)	女子 (n=67)	男子 (n=63)	女子 (n=65)	男子 (n=41)	女子 (n=86)	男子 (n=47)	女子 (n=96)	男子 (n=47)	女子 (n=93)	女子 (n=120)	女子 (n=124)
抑うつ	-.14	-.14	-.20	-.27*	-.34*	-.18	-.17	-.18	.07	-.36**	-.04	.03	-.13	-.24*
対人不安	-.29*	-.32*	-.21	-.28*	-.12	-.10	-.27	-.07	-.15	-.18	-.29	-.11	-.11	.03
攻撃性・衝動性	-.49**	-.31*	-.30*	-.43**	-.41**	-.34**	-.17	-.28*	-.06	-.24*	-.32*	-.06	-.19*	-.25**
非効力感	-.35**	-.15	-.33*	-.47**	-.30*	-.46**	-.46**	-.30*	-.18	-.49**	-.06	-.28*	-.20*	-.27**
身体症状	-.24	-.11	-.27*	-.35**	-.49**	-.38**	-.18	-.40**	.00	-.24*	-.25	-.14	-.27*	-.27**

(2)メンタルヘルス尺度と友人関係尺度との関連　小学生では、ほぼすべての学年において、「友人に対する信頼感」は、「対人不安」および「非効力感」と有意な相関があり、友人に対する信頼感が高い子どもほど、対人不安が低く、効力感が高いことが示された。「友人との気兼ねした関わり」は、4年生では男女ともに、いずれのメンタルヘルス変数とも有意な関連が見られないが、5、6年生になると、女子では、「対人不安」や「非効力感」、さらには「抑うつ傾向」との間に有意な相関を示すようになった。相手のことを気にしすぎ、遠慮した友人関係を持ちやすい子どもほど、対人不安および抑うつ傾向が高く、効力感が低いと言える。男子では、友人関係とメンタルヘルスとの間にあまり有意な関連が見られず、その関連の程度も弱いことから、小学生では、女子のメンタルヘルスの方が、友人関係とより関連していることが示唆された。中学生では、男女ともに、「友人に対する信頼感」および「友人との気兼ねした関わり」のいずれもが、「対人不安」との間に一貫して比較的強い有意な相関を示した。また、「友人との気兼ねした関わり」と「抑うつ傾向」との間には、一貫して強い有意な相関が見られた。小学生と同様、「非効力感」と「友人に対する信頼感」とは有意に関連していたが、その関連の程度は、「対人不安」や「抑うつ傾向」に比べると、全体的に弱いものにとどまった。

表4. メンタルヘルス下位尺度と友人に対する信頼感尺度との相関係数

	友人に対する信頼感													
	小4		小5		小6		中1		中2		中3		高1	高2
	男子 (n=60)	女子 (n=63)	男子 (n=67)	女子 (n=67)	男子 (n=63)	女子 (n=65)	男子 (n=41)	女子 (n=86)	男子 (n=47)	女子 (n=96)	男子 (n=47)	女子 (n=93)	女子 (n=115)	女子 (n=110)
抑うつ	-.01	-.26*	-.18	-.12	.08	-.32*	-.35**	-.13	.23	-.18	-.06	-.28**	-.28**	-.12
対人不安	-.29*	-.45**	-.27*	-.30*	-.23	-.22	-.46**	-.36**	-.32*	-.38**	-.53**	-.44**	-.34**	-.33**
攻撃性・衝動性	-.15	-.40**	-.13	-.19	-.27*	-.05	-.02	-.03	-.05	-.17	-.13	-.15	-.23*	-.05
非効力感	-.07	-.37**	-.24	-.28*	-.36**	-.31*	-.47**	-.13	-.29*	-.29**	-.22	-.31**	-.23*	-.29
身体症状	.04	-.20	-.04	-.33**	-.06	-.18	.00	-.12	-.12	-.23*	-.21	-.19	-.27**	-.12

表5. メンタルヘルス下位尺度と友人との気兼ねした関わり感尺度との相関係数

	友人との気兼ねした関わり													
	小4		小5		小6		中1		中2		中3		高1	高2
	男子 (n=60)	女子 (n=63)	男子 (n=67)	女子 (n=67)	男子 (n=63)	女子 (n=65)	男子 (n=41)	女子 (n=86)	男子 (n=47)	女子 (n=96)	男子 (n=47)	女子 (n=93)	女子 (n=115)	女子 (n=110)
抑うつ	.22	.25	.21	.37**	.26*	.29*	.37*	.42**	.62**	.43**	.47**	.61**	.29**	.35**
対人不安	-.11	.00	.03	.10	-.18	.37**	.31*	.38**	.32*	.30**	.15	.41**	.31**	.40**
攻撃性・衝動性	-.13	-.05	-.05	-.21	-.19	-.08	.01	.06	.29*	.02	.16	.01	-.12	-.05
非効力感	.09	.13	.08	.22	-.09	.40**	.15	.13	.23	.07	.31*	.14	.36**	.27**
身体症状	.22	.08	.11	.10	.07	.19	.25	.16	.24	.10	.27	.37**	.38**	.30**

高校生(女子のみ)においても、その関連の程度はやや弱まる傾向にあるが、中学生女子の結果と類似して、「対人不安」「抑うつ傾向「非効力感」「身体症状」といったメンタルヘルスの複数の側面と友人関係に関する変数とが有意な関連を示した。

(3)メンタルヘルス尺度と学校適応尺度との関連　小・中・高いずれにおいても、メンタルヘルスの様々な側面と学校場面での適応、特に「引きこもり」とが一貫した関連(r=.29～.57)を示した。また、特に、小学生においては、「引きこもり」以外の様々な学校場面での適応とも一貫して比較的強い相関が見られた。

【考察】

本調査では、第1に小学校高学年から高校生における全般的なメンタルヘルスの特徴をつかむための尺度の作成を行った。その結果、「抑うつ傾向」「対人不安」「攻撃性・衝動性」「非効力感」「身体症状」の5つの同様の下位尺度で、小学生から高校生までのメンタルヘルスの状態がある程度捉えられることが示された。共通した尺度を用いることで、縦断的な検討が行いやすくなり、発達的な視点で心理的不適応が生じる要因を同定していくことが可能になると考えられる。今後、尺度のさらなる精緻化が望まれる。

第2に、作成したメンタルヘルス尺度と友人関係・親子関係および学校適応に関する尺度との関連を検討した。友人や親は、この時期の子どもにとって身の回りの重要な他者であることから、メンタルヘルスとの関連が予測されたが、結果は予測通り、従来の知見と符号するものであったと言える。中学生や高校生と比較すると、小学生では、親子関係要因がそのメンタルヘルスに大きく関わっていた。特に、「非効力感」、「攻撃性・衝動性」といった側面にとって、親子関係が重要であることがうかがえた。一方、友人との関係は、中学生以降に、メンタルヘルスの様々な側面、特に、「対人不安」、「抑うつ傾向」といった側面と関連していた。小・中・高と進むにしたがい、親子関係とメンタルヘルスとの関連が相対的に弱まるという結果とあわせると、家族を主とするものから友人を含むように対人関係が拡大する中で、友人関係が対人関係の重要な位置を占めるようになり、子どものメンタルヘルスに大きく関わってくると考えられる。

学校適応に関する尺度とメンタルヘルス尺度との関連については、「学業重視」以外の学校適応に関する下位尺度はすべて、メンタルヘ

ルスの何らかの側面と関連があることが示された。特に、「引きこもり」は、ほぼすべてのメンタルヘルスの側面と関連しており、生徒・児童のメンタルヘルスの悪さが学校場面での引きこもりという形で表れやすいことがうかがえた。また、特に、小学生においては、「引きこもり」以外の「反発」「授業・試験への不安」「自信」といった様々な学校場面での適応とも関連を示し、小学生のメンタルヘルスは学校生活場面での適応と密接に結びついている可能性が示唆された。

＜調査２：学級担任への調査～心理的援助の必要可能性が示唆される生徒の特徴～＞

【目的】

本調査は、【研究の概要】における①児童生徒のメンタルヘルスを把握するためのアセスメントツールの整備、②個々に応じた援助プログラムの作成と援助システムの構築、部分に対応し、それらを精緻化していくための試みである。具体的には、＜調査１＞で作成したメンタルヘルス尺度を用いてリストアップした、心理的援助の必要性が示唆される生徒を学級担任にフィードバックし、学級担任からみた各生徒の結果に対する印象との一致度、およびずれを検討する。さらにそのような生徒の特徴についても学級担任へのインタビュー調査を交えて検討を加えることである。

【方法】

（１） 調査対象

＜調査１＞においてメンタルヘルス調査(記名式)に回答した生徒のうち、中学２年生４クラス（男子 43 名、女子 94 名、計 137 名）の学級担任（男性２名―30 代・40 代各１名、女性２名－20 代・40 代各１名）を対象とした。

（２） 調査内容

本調査の準備として、＜調査１＞におけるメンタルヘルス調査に基づき当該学年集団において心理的援助の必要性が示唆される生徒をリストアップした。リストアップの基準は、メンタルヘルス下位尺度得点の平均値（以下、「メンタルヘルス項目得点」と記載）を算出し、この値が学年内で上位 10%に含まれる生徒とした。これらの生徒のメンタルヘルス下位尺度結果を学級ごとにまとめて一覧表を作成し、各学級担任にフィードバックした。そして、

１．リストアップされた生徒の結果に対する印象の評定

２．学級担任からみたリストアップされた生徒の特徴

の２点の内容について調査を行った。なお、＜調査１＞のメンタルヘルス尺度作成において十分な信頼性が得られず分析から除外した「体重へのこだわり」、「強迫傾向」の２因子についても臨床上意味があると判断し、フィードバックの内容に含めることとした。

（３） 調査方法および調査手続き

内容１では、結果に対する意外さの程度について「意外」「少し意外」「納得できる」の 3 段階で評定を求めた。そして、メンタルヘルスが相対的に低い生徒は学級担任からみてどのような生徒だと認知されているかについて 45 分程度の半構造化面接を行った（内容２）。面接時までに評価定を用紙に記入しておいてもらい、結果をもとに面接を行った。

【結果】

（1） リストアップされた生徒の特徴と学級担任による評定の結果

＜調査１＞に回答した中学２年生１３７名のうちリストアップされた生徒は、男子３名、女子１６名の計１９名で、メンタルヘルス項目得点は3.10～3.83の範囲であった。中学２年生全体とこれらの生徒のメンタルヘルス項目得点、メンタルヘルス下位尺度の平均値および標準偏差を表１に示す。

表１．メンタルヘルス下位尺度平均値（標準偏差）
-リストアップされた生徒、中学2年生-

	リストアップされた生徒 （n＝19）	中2全体 （n＝137）
メンタルヘルス項目得点	3.31(.17)	2.45 (.52)
抑うつ	3.82(.62)	2.64 (.84)
対人不安	3.28(.75)	2.50 (.86)
攻撃性・衝動性	3.17(.71)	2.35 (.70)
非効力感	3.16(.73)	2.36 (.78)
身体症状	3.00(.70)	2.10 (.73)
強迫傾向	3.42(.93)	2.94 (.86)
体重へのこだわり	3.47(1.02)	2.42 (1.11)

このうち、リストアップされていることが「意外」だと学級担任から評価された生徒は１名（5.3%）、「少し意外」と評価された生徒が３名(15.8%)で、他の15名(78.9%)については「納得できる」という回答だった。「意外」、「少し意外」と評価された４名とその他の１５名のメンタルヘルス下位尺度平均値を示したものが図１である。学級担任によって「意外」、「少し意外」と評価された生徒は、「体重へのこだわり」と「強迫傾向」の得点が高い可能性が示唆された。

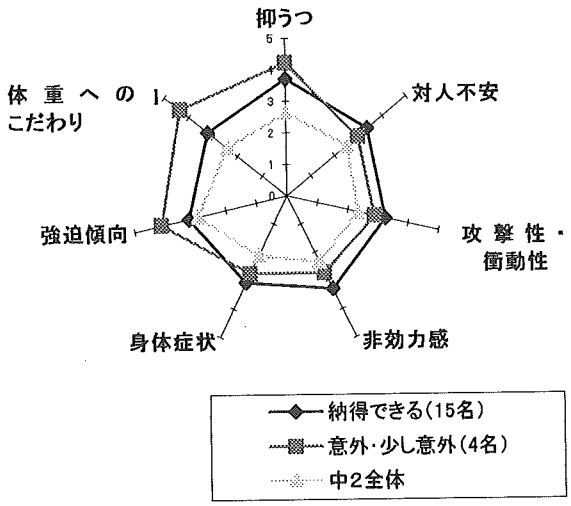

図１．メンタルヘルス下位尺度平均値の比較

（2） 学級担任へのインタビュー結果

リストアップされた生徒の印象について学級担任にインタビューを行ったところ、「意外」「少し意外」だと評価された生徒４名については、「こまやかでリーダー的存在」「（物事に）一生懸命取り組む」「今まで何もかもうまくいってきた」「友達に認められていて前向き」という印象が語られ、学校生活へも適応し、対処能力の高い生徒と認識されていることが伺えた。一方、「納得できる」と評価された生徒の特徴としては、「口数が少なく、おとなしい（15名中６名）」「しっかりしている（同４名）」「他校からの進学者（同３名）」などで、内向的な性格傾向や外的な要因をもつ生徒が挙げられた。

【考察】

本調査は、本研究の実践部分の一部を担うものである。

今回の調査では、メンタルヘルス調査に基づきリストアップされた生徒、すなわち心理的援助の必要性が示唆される生徒と、教師にとって気がかりな生徒とはほぼ 80%一致していた。

その一方で、意外だと感じられている生徒も約20%おり、平均すると一クラスに1名程度存在していた。そして、そのような生徒は学校生活にも適応的であり、教師から概ねポジティブな印象で捉えられているため援助の必要性を感じさせにくい生徒だと推測された。

以上のことから、作成されたメンタルヘルス尺度は、学校現場において教師にも理解・活用されるツールとなり得ること、さらに、教師の目に止まりにくい生徒の心の状態を再確認する機会を提供できるものと言えよう。

今後はさらなる尺度の精緻化に加え、メンタルヘルス調査の結果を活用してどのような実践が可能であるか、対象や内容を検討し、実践を積み重ねていく必要がある。また、本結果は限定された対象におけるものであり、調査校の拡大も課題である。

【まとめ】

本研究では、教育場面における心理的問題を生涯発達の視点から理解しようとする部分と、具体的な援助システムを構築するという実践的な部分が含まれており、教育現場のニーズに応えうる知見を提供できる意義があるものと思われる。

従来の大学研究者が行う基礎的な研究が、教育現場をデータ収集の場として用いるだけのものが多いという批判があるが、調査活動そのものが当該校のメンタルヘルスの状況を知ることに役立ち、さらに個別の事例検討の積み重ねが、実践に役立つ援助モデルを構築することになり、こうした意味で、教育者と研究者の互恵的な協同型実践研究が実現可能であろうと思われる。

【現在の研究進行状況及び今後の見通し】

現在、平成14年度のメンタルヘルス調査を実施し、学校園に結果のフィードバックを終えたところである。今年度は、幼稚園から小学校低学年を対象とする教師記入型の調査用紙を作成し、実施することができた。また、小学校入園時に全家庭に向けての子育て意識の調査なども行い、幼小移行期の問題について検討中である。詳細は、別の機会に報告していきたい。

また個別の援助、あるいはフォローアップが必要と判断される児童・生徒について、大学附属心理相談室と養護教諭及び担任とが連携して、心理的援助を開始しているのが現段階である。

今後も本メンタルヘルス調査を機軸に、心の教育とケアの充実に向けた学校臨床実践研究を継続し、広い意味での生涯発達研究を進めていく所存である。

【文献】

森下正康　1981　児童の親に対する親和性の因子構造と尺度の作成　和歌山心理研究会, 57-72.

岡田努　1991　現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究　東京都立大学心理学研究, 1, 11-18.

岡安孝弘・島田洋徳・坂野雄二　1992　中学生用ストレス反応尺度の作成の試み　早稲田大学人間科学研究,5,23-29.

園田菜摘・櫻井聖子・大島知佐子・青木紀久代・無藤隆・山梨八重子・高木悦子　2000　小・中学生のメンタルヘルス：尺度の作成と学校生活との関連.　お茶の水女子大学発達臨床心理学紀要,2,15-24.